# 2025 年度 福祉助成金（研究助成）完了報告書　提出用

公益財団法人 橋本財団
理事長 橋本 俊明 様

2026 年　5 月　26 日

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ふりがな | おかやまだいがく | | | |
| 大学<br>研究機関名 | 岡山大学 | | | |
| 代表者名 | 役職名 | 名誉教授 | 氏名 | 東條　光彦 |
| 連絡先 | 住所 | 岡山市北区中井町２－６－５－１１０４ | | |
| | TEL | ０８０－１６３４－２６２９ | | |
| | E-mail | tojo_m@okayama-u.ac.jp | | |
| | URL | | | |
| 助成額 | 1,000,000 円 | | | |
| 研究要旨 | 児童養護施設等における不適切処遇の発生要因に関する検討を行った。不適切処遇の指標として子どもとの相互作用の中で現れる可能性のある「おびえたような/おびえさせるような行動（**frightened and/or frightening behavior：以下** FR 行動)」に注目し、その発生における心理的要因の同定と関連性の解明を試みた。<br>施設職員に対する個別インタビュー調査に基づく質的研究と、一定数サンプルの質問紙調査による量的研究を実施した。その結果、質的研究では、職員には、児童からの攻撃行動を受けて怒りや不快感など FR 行動の背景になり得る情緒的反応が認められ、FR 行動の維持に関する所見が得られた。量的研究においては、若年層、中堅職員は、中年層、ベテランより回避対処的 FR 行動をとりやすい傾向が示された。また、対応困難な児童への関わりで、問題逃避的、他者依存的なコーピングを用いた際は子どもとの関わりを回避する FR 行動が表出されやすいことが示唆された。一方、回避的・解離的な FR 行動は、カタルシスや問題逃避思考と類似した性質を持つことも示唆され、FR 行動は単なるストレス反応ではなく、職務ストレスへのコーピング方略として機能している可能性があると思われた。 | | | |
| 研究の目的 | 我が国では、社会的養護を必要とする児童の多くが児童養護施設を主とする児童福祉施設等に措置され生活しているが、適切な生育環境に保護され生活しているはずの施設において、施設内虐待事案がしばしば報告されている。このことから、処分や研修を主とする現行の対応策を超えた新たな問題理解と対応の枠組みの検討が必要となっている。<br>施設における不適切な処遇行動の一部は、現在では「FR 行動（frightened/frightening：「おびえたような / おびえさせるような」行動)」と呼ばれ、職員による虐待や不適切ないし不十分なかかわりへの新たな理解のためのキーワードとなっている。しかし、FR 行動についてはこれまでその発生メカニズムについて十分な検討がなされていないのが現状である。FR 行動は困難な処遇に対する職員のストレス反応、とりわけ直接的、間接的攻撃行動とも解され、そうした面からの理解も求められる。<br>そこで本研究では、児童養護施設等勤務の児童の処遇に直接あたる職員を対象に、処遇における困難点やそれに対する対応や自身のストレスマネジメントについて質的、量的調査を行うことにより、FR 行動の発生因を探索的に検討した。 | | | |
| 研究の<br>実施方法 | 【研究 1】FR 行動の発生に関わる国内外の研究は限定的であり、職務ストレスへの反応として位置づけた研究はない。そのため、まずは現役職員 10 名を対象とし、児童処遇とりわけ処遇困難児童への対応や処遇時のストレッサーの同定を行い、その対処およびその有効感、ストレス反応の評価について、さらには職務に対する満足度、充実感について直接インタビュー調査を行いてストレス反応としての FR 行動の発生要因およびその経路を推定した。<br>【研究 2】前述の通り FR 行動をストレス発生メカニズムの中に位置づけて検討した研究はない。そこで、研究 2 においては、Lazarus, & Folkman, (1984)によるストレス処理過程論に基づく量的調査により、FR 行動発生にかかわる心理社会的メカニズムの数量モデルについて検討を行った。ストレス処理過程論では、ストレス反応は、ストレッサーの入力⇒個人内資源等による緩衝効果⇒ストレス反応との過程を経て算出されるとされる。研究 2 では、ストレスの入力要因として、①就労時間、②質的研究で同定された主観的職業ストレス、③職務困難感を、個人内要因として①職業的自己効力感、②レジリエンスを、FR 行動をストレス反応としたモデルにより検討した。 | | | |

| | |
|---|---|
| 研究の成果 | 【研究 1】10 名の研究協力者の陳述より、児童からの攻撃行動を受けて、職員には怒りや不快感など FR 行動の背景になり得る情緒的反応が一部認められた。一方、聞こえないフリをする、などの FR 行動は、受動的攻撃として用いられている可能性もあった。また、児童対して過度に親密な態度や、避けるような態度をとることで児童の攻撃行動を回避するなど、FR 行動の一部はストレス要因の回避機能を有しているとも考えられた。<br>【研究 2】収集されたデータに基づき、ストレス処理過程理論による分析を行った結果、若年層，中堅職員は、中年層，ベテラン職員よりも回避対処的な FR 行動をとりやすい傾向が示唆された。また、対応困難な子どもとの関わりにおいて、問題逃避的，他者依存的なコーピングを用いて対処した際、子どもとの関わりを回避する FR 行動が表出されやすいことが示唆された。一方、FR 行動のうち、回避的・解離的な FR 行動は，カタルシスや問題逃避思考と類似した性質を持つことも示され、FR 行動は単なるストレス反応ではなく、それ自体がコーピング方略として機能している可能性があると推察された。 |
| 研究の成果の公表状況<br><br>今後の公表予定について | 日本認知・本行動療法学会第 50 回、51 回大会において公表した。<br>また、「岡山大学臨床心理学論集第 23 号，pp.1－6（2025）」において公表した。 |

**＊2026 年 5 月 31 日締切です。必要事項を入力のうえ Word ファイルをメールにてご提出ください。**